

月歩学歩

“月日を歩き、学んで歩く” 明德の「今」を伝える月刊誌「げっぼがっぼ」

卒業

3月15日に卒業式が行われ、第44回生がそれぞれの現場へと旅立ちました。卒業式とその後に開催された卒業パーティーは、学生同士が思い合い、尊敬し合う、とてもあたたかい会となりました。本号では、これらの模様を特集Ⅰとしてお届けします。

また、この明德短大を長きにわたり牽引してきた館学長が3月をもって退任することとなりました。特集Ⅱでは、退任にあたり、明德での40年間をふりかえり、今の想いや学生たちへ伝えたいことを語っていただきました。

明德短期大学 卒業証書授与



特集Ⅰ 第44回生卒業

(P.2-11)



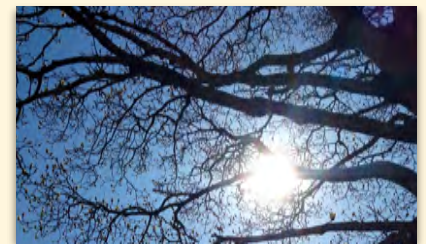
特集Ⅱ (P.12-15)

館学長退任にあたって
明德での40年をふりかえって



1年生の3月 (P.16-17)

1年間の実習での学びから



教員からのおすすめ

(P.18)

!hot news!

今月の明德速報

(P.19)

特集 第44回卒業





第44回生となる2年生が、3月15日に卒業を迎えました。卒業式では、校歌の他に、授業でたびたび歌った「この星に生まれて」を歌うなど、この学年らしさを感じられる式であったように思います。この2年間で、学生も、保護者の方々も、教職員も、思い起こすことができた式だったのではないのでしょうか。そして、それぞれの思いが詰まっていたからこそ、多くの涙が溢れる式だったのではないのでしょうか。その後行われた卒業パーティーのテーマは、「私たちの原点」。明德が、皆さんの原点と思える場所になっていたら嬉しく思います。パーティーも、参加する人全員のことを思い合う、この学年らしさが表れていました。次ページからは、式で話されたメッセージをご紹介します。



卒業生からの メッセージ

卒業生代表 高橋千耀



卒業生の皆さん。明德での2年間を終える今日という日を、どのような気持ちで迎えていますか？ この度、私がこのような素敵な式で答辞をさせていただくと聞いた時、夢ではないかと何度も思いました。なぜなら、入学する前の私は、友達に合わせるばかりで自分のしたいことをせず、人前に立って何かをするということもなかったからです。しかし、明德に入ってから、私なりに自分に挑戦した2年間となりました。そんな私に、このような機会を与えてくださった先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、明德の全ての人に感謝の気持ちを込めて言葉を贈りたいと思います。

皆さんにとって明德はどのような場所でしたか？ 私にとって明德は、「行きたくなる場所」でした。辛いことがあっても、「足を運びたくなる場所」、そして何より、「自分が自分らしくいられる場所」でした。

思い返してみれば、2年間、色々なことがありましたね。期待と不安の気持ちを抱きながら、明德の門をくぐった2年前の春。一人ひとりが、緊張の中、自己紹介と決意表明をした入学式。皆で本気になって取り組んだスポーツ大会や学園祭。最後の最後まで挑戦し続けたゼミの活動。辛いことも乗り越えながら頑張った実習。学友会が企画してくれた様々な行事活動。そして、自分の将来を決める就職活動。学年全員の最後の集大成となった「学びの成果発表会」。他にもこの紙に書き切れないほど、皆も一人ひとり、色々なことがあったと思います。

2年間はあっという間でしたが、入学したあの日は遠い昔のように感じます。私は、今の自分と2年前の自分は別人だとさえ感じています。今の私は、人の顔色をうかがうよりも、「挑戦したい」という気持ちが強くなりました。そんな風に私を変えてくれたのは、人との出会いです。

その中でも、私にとって最も大きかったことは、子どもたちとの出会いでした。私は、子どもたちがいたからこそ、今の自分がいると思っています。

実習では、出会った子どもたちの優しい心、真剣な姿勢、豊かな想像力に触れ、毎日感動して涙が溢れそうになったり、ハッとさせられたりしました。砂に足を埋めて「足が温かくなったら、心も温かくなったよ。」と言う温かい心。どんなことも楽しもうとする素敵な想像力。本気で取り組んでいるからこそ、遊びで負けて流す悔し涙。友達が泣いている時にそっとティッシュを差し出す人の痛みがわかる優しい気持ち…。何気ない毎日の一つひとつが、子どもたちにとっては大切なことで、そんな子どもたちとの関わりが、私にたくさんのことを教えてくれました。

そして今も、出会った子ども一人ひとりの顔と姿が浮かんできます。例えば、A君は、友達の悪い所を見つけては、先生に報告するような子どもでした。けれども、じっくり関わってみれば、困っている子をすぐに見つけられるような、他の子どもたちのことをよく見て、気遣う子でした。このようなA君の姿から、皆と少し違う所も含めて、その子の素敵な所だと気づくことができました。その違いが、とても大切なことだともわかりました。

同じように、私たちも、一人ひとり皆違います。感じ方も、考え方も、表現の仕方もそれぞれです。だから、いいのです。そして、皆に、素敵などころがあるのです。だから、子どもたちには、あなたの良いところを大切にしてほしい、あなたにはこんな素敵などころがあるんだよ、そのままのあなたという存在が素晴らしいんだよ、ということ伝えていきたいです。子どもたちが大人になっていく中で、人のことを見た目判断したり、自分と違う、合わないから、と相手を否定したり、傷つけたり、関係を終わりにしたりせず、皆一人ひとり違うけれど、そこが良いところだと気づき、その人の良いところをたくさん見つけられる大人に育ってほしい。自分を、人を、愛せる人に育ってほしい。そう思いました。そして、このことを、子どもだけではなく、保護者の方にも、そして、明德の皆にも伝えたいです。

この2年間を通して、私は明德にいる色々な人の素敵な所をたくさん見てきました。だから、自分のことを愛してほしい。大切にしてほしい。そして、これから出会う人やもう出会っている人のことも同じように愛してほしい。そう願っています。そんな、自分を愛し、人を愛する人で溢れたら、この世界はもっと素敵なものになると思います。

この2年間は、楽しいことばかりではありませんでした。「いつも笑顔だね」と言われる私ですが、上手く笑えない日もありました。笑顔でいても、笑顔でいることが辛い時もありました。このままの自分でいいのかと立ち止まり、「私は何もできない」と自分を責め、反省する日もありました。しかし、私の側には、それぞれの夢や目標に向かって励まし、刺激し合い、笑い、泣いて共に過ごしてきた友人、私の不安や悩みを親身になって聞いて下さり、一緒になって本気で考えて下さった先生方、嬉しいことがあると一緒に喜んで下さった家族のような事務の方々、不安な気持ちや忙しさを優しく見守り、応援してくれた家族がいました。そのおかげで、どんなに辛く、大変なことも、乗り越えることができました。明德で出会った全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、4月から就職先の幼稚園で担任をもつことが決まり、正直、不安な気持ちもあります。しかし、その不安な気持ちも全部ひっくるめて、楽しみな気持ちが強くあります。自分らしく、人間らしく子どもたちと本気で関わっていける保育者になれるよう、一日一日を大切に、1年目だからこそできることにどんどん挑戦していきます。

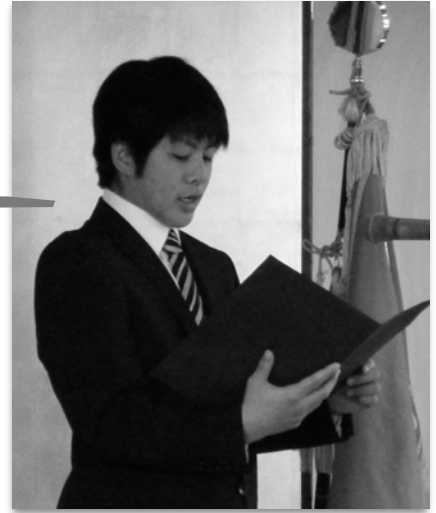
これから2年生になる1年生の皆さん。挑戦したいことがあっても、不安な気持ちから、一歩踏み出せていない人もいるかもしれません。でも、大丈夫。踏み出した先には失敗もあるかもしれないけれど、失敗して良かったな、この失敗は自分のためだった、と思える日が必ず来ます。自分のしたいことに挑戦するのは、心から楽しいことです。だから、あと1年、自分のしたいことに思い切り挑戦して下さい。

これからそれぞれの道に進んでいく卒業生の皆。これから進んでいく道の途中で壁にぶつかり、立ち止まることもあるかもしれない。けれど、この2年間も色々乗り越えながら、ここまで一生懸命歩いて来られたから大丈夫。私は、皆のきらきら輝いている笑顔が大好きです。これからも一緒に、自分らしく、皆らしく輝いていきましょう。

たくさんのありがとうと頑張ろうを込めて。

1年生から 2年生へ

在校生代表 大宮優一



2年生の皆さま、ご卒業おめでとうございます。こんなにも早く、この時が来るとは思っていませんでした。1年間本当にお世話になりました。

先輩方とはサークル活動をきっかけにたくさんの交流を持つことができました。

4月の初めに先輩たちによるサークル紹介がありましたが、声をかけられ気がつく「バスケ・バレーサークル」に入っていました。これは、名前の通りバスケットやバレーボールを楽しむサークルです。私たちは、初めの頃は緊張していましたが、先輩たちが積極的に話しかけてくださったので、だんだんと打ち解けることができました。

何をするにしても笑顔で明るく楽しもうとする先輩たちの姿は魅力的でした。

普段の学校生活でも、朝、私が挨拶すると、追いかけてきて笑わせてくれたり、行事の参加に声をかけていただいたり、そこでの先輩たちはいつも笑顔で、一緒にいる私までも巻き込み笑顔にしてくれました。

学園祭では、サークルで恒例の「お化け屋敷」を行いました。ガイコツを自分たちでつくったり、通路をつくるためにビニールを切ったりといろいろな作業がありました。はっきりいって面倒な作業もありましたが、そんな中でも楽しむことを忘れない先輩たちの姿が見られました。それを見て、私も、「楽しもう！」という気持ちが湧いてきました。当日もお化け役の先輩方がどうやってお客さんたちを驚かせようかと細かい工夫をされていて、とても楽しい雰囲気でした。初めての学園祭で何をしたらいいのかわからなかった私たちに昨年の「お化け屋敷」の様子を話してくださったり、細かな配慮を欠かさず、先輩たちは、引っ張って行ってくださったのだと思います。

サークルに参加したことがきっかけとなり、様々な場面で先輩方から声をかけていただき恵まれていたのだと今改めて思います。

2年生の皆さんは、スポーツ大会、ハロウィンパーティー等楽しい企画をしてくださいました。先輩方には、学校を盛り上げようという皆さんの強い気持ちがあったのだと感じます。しかしながら、1年生の参加は決して多くなく、残念なことをしてしまったと今更ながら思います。

学業では幼稚園実習の部分実習での指導案作成のアドバイスをいただいたりと様々な場面で助けていただいたように思います。

その中でも、「実習にあってらっしゃい会」が印象に残っています。この会は、2年生の学友会の皆さんが主催して、1年生が保育実習へ出て行くにあたって、少しでも不安を和らげようというものでした。そこでは、サークルの先輩をはじめ多くの先輩に、実習での不安や悩みを聞いていただき、すいぶん気持ちが軽くなりました。たとえば、施設での実習は、私にとって未知のもので、まったく想像ができませんでしたが、施設での利用者さんや職員の方とのかかわりについての体験を具体的に話してくださいました。

自分も2年生になったら、あんな風の後輩の話を聞き、自分の経験を話したり、アドバイスできる先輩になれたらいいなと憧れました。去年は、このような会が無かったことを後から知り、先輩方が本当に私たちのために開いてくださったのだと、改めて感謝の気持ちで一杯です。私たちも、後輩との交流を大切にしていきたいです。

最後の最後には、先輩方の「本気」を見せつけられる機会もありました。

2年間の学びのまとめの発表会である「学びの成果発表会」です。ある部屋をのぞくと、いつもは1年生を楽しませてくれるサークルの先輩が一つの保育についての課題を他の先輩方と真剣に話し合っていました。周りで見えていた先輩も自分の意見をいい、白熱した議論をしている姿が印象に残りました。また、1年間の学びをビデオで上映し説明する発表や舞台でのパフォーマンスもありました。発表する先輩方は「実習にあってらっしゃい会」の時のなごやかな感じと違い、真剣に自分たちの思いを伝えていました。1年後にそんな発表をしている先輩方のようになれるか、自分は不安ではありますが、先輩たちを目標にしてがんばっていきたいと思います。

そんな先輩方と過ごした一年はとても楽しく、本当にあっという間に過ぎてしまいました。

本日、卒業される先輩方、卒業後も時折、学校へお越しください。そして、先輩方が社会で学んだこと、経験したことをまた教えてほしいと思います。

皆さまのご健康と、さらなるご活躍をお祈りし、送辞とさせていただきます。

理事長祝辞

理事長 福中儀明



卒業証書を授与された127名の皆さん卒業おめでとうございます。またご家族の皆様方もおめでとうございます。

皆さんは千葉明德短期大学の第44回の卒業生になります。二年間の努力の甲斐あって、今日の卒業を迎えることができたわけであり、その学修内容を生かし、これからのそれぞれの進路先での一層の活躍を期待しています。

さて、これから皆さんが出て行く社会の現状はどのようなものでしょうか。日本の少子化・高齢化は続いています。景気が回復したとはいっても経済格差が開いたという新たな問題もでてきています。世界では多くの地域で民族紛争が拡大しています。世界は決していい方向には向かっていないように思えます。

そのような世界で何よりも大事なものは教育であると私は考えます。そして教育は幼児の段階から始まります。

これから皆さんがかかわる幼児教育という仕事は、個人的な子育ての支援にとどまらず、世界の平和につながる場合もある、ということの実例をひとつお話しておきます。世界から不幸な子どもを減らすために行動する——そんな先輩がいます。

千葉明德学園はネパール西部のディリチョール村の公立幼・小・中・高一貫校と姉妹校提携をし、毎年教員を派遣して学校で授業をしたり、学用品を寄附したり、村人と交流するなどの活動を行なっています。

ネパールはチベットとインドの間、ヒマラヤ山脈を擁する国で、面積は日本の約4割、人口は2800万人、一人当たりの年間平均収入は5万円で世界最貧国のひとつでもあります。小学校・中学校は義務教育ですが就学率は100%にはるかに届かず、特に西ネパールでは首都カトマンドゥに比べて生活水準は低く教育の遅れが目立ちます。

姉妹校のあるディリチョール村はヒマラヤの中腹・標高2600mにあります。小さなプロペラ機で谷間の飛行場に降り、車の通れない山道を15km歩いていきます。校庭に並んだ生徒たちは両手を合わせて「ナマステー」と挨拶して歓迎してくれます。学校に行けるだけで幸せ、と感じている子どもたちです。日本から来たわれわれの授業を眼を輝かせて聞いてくれます。

そしてある年、私は明徳本八幡駅保育園の保育士と一緒に姉妹校に行くことになりました。澤田恵さんという人です。途上国への海外旅行は初めてという人で、ネパールの田舎の山の中の生活に耐えられるかと私は心配しました。しかしそれは杞憂に終わりました。ネパールの子どもと楽しく遊んで立派な保育をしてきました。

ネパールで親しくなった子どもたちと別れるとき、澤田さんは涙をこらえ切れませんでした。子どもたちはわれわれが歩いて帰る山道をどこまでもついてきて、なかなか離れません。最後は無理やり追い返したほどです。そのとき澤田さんは、ひそかに思ったのです。日本を出て、世界のどこかで子どもたちのために働きたい、と。世界のどこかに私を待っている子どもたちがいるかもしれない、と。

そして日本に帰り、本八幡駅保育園に戻り、しばらくしたある日、私に相談がありました。国際協力機構・通称JICAという外務省関連の団体の青年海外協力隊にはいり、どこか途上国に行つてその国の幼児教育を助けたいと。

正直言って私は困りました。優秀な保育士がやめてしまうのは困るし、危ない国に派遣されたら命にもかかわります。でも本人にその決意をさせたきっかけは私がネパールに誘ったからですから、拒むわけにも行きません。ためらいながらもOKしました。

試験を受けて合格して青年海外協力隊にはいり、訓練を受けて、やがて派遣される国が決まり私のところに報告が来ました。ヨルダンという国です。最近話題の国のひとつですから皆さんわかりますね？ 数年前のことですから今ほど危険はありませんが、隣の国は既に内戦の始まっていたシリアとイラクです。何十万人と言う避難民がヨルダンに来てキャンプに住んでいます。その中にある幼稚園で保育をするという大変難しい仕事です。覚えてたのアラビア語で保育をするのですから、楽ではないのは想像がつくでしょう。

でも澤田さんは2年間、ヨルダンの難民キャンプの幼稚園での仕事を立派にこなし、無事に帰国しました。日本での保育も、難民キャンプでの保育も、子どもを元気に健やかに育てるためにあるという基本は同じ、違いは、時に銃声が聞こえることもあるという環境の問題だけ、ということでした。

そして澤田さんは世界の平和を願うようになったのです。難民キャンプの子どもが安全に幸せに暮らせるような世界の実現を願うようになったのです。

日本の幼児教育が世界とつながり、平和を願う心もつながったのです。

皆さんがこれから出て行く世の中、ほかにもいろいろ問題があるでしょう。しかし、教育・保育という仕事の尊さは永遠のものです。子どもの数が減れば逆にその重要性がますます大きくなっていきます。

子どもを愛して、子どもの幸せのために力を尽くしてくれることを期待し、理事長よりの卒業のお祝いのことばといたします。

学長式辞

学長 笹光夫



ただ今、卒業証書を授与された127名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。ご家族の皆さま、誠におめでとうございます。

卒業生の皆さんは、近年にない元気な学生が多い学年で、様々な挑戦をしてくれたと思っています。

さて、二年の後期、実習も終え、それぞれの進路の岐路に立つ10月になると、私が学生に毎年問い続けてきたことがあります。保育を学ぶことに対して私がこだわり、大切に思っていることです。「子どものエピソードを書こう」「目をつぶり脳裏に浮かぶ子どもの姿を自分の言葉で書いてみよう」そう問い続けてきました。

その時に紹介するレポートがあります。4年先輩になる40回生の幼稚園実習での“5歳児S君”のレポートです。この男の子は少々乱暴で勝手に保育室から走り出たり、絵本を読んでいる先生の前を走りまわったり...クラスからも園全体からも“特別な子ども”と見られていました。3週間の実習期間、この男の子を観察し、関わっていく中で、家に戻っても安心して居られない家庭環境の中で育っていることを知り、自分の境遇と重なってくることに気づいてきます。そして、20歳の自分が背負う荷物の重さと、5歳の子どもの背負う荷物の重さを考え、悩みます。こうした荷物を背負う子どもの気持ちを理解できる保育者になろうと決心します。つまり、子どもの立場に立つ保育者に、大人になろうと決意するのです。

次に紹介するレポートは、同じゼミ生で、S君のレポートと一緒に読んだ仲間のひとりです。

彼女は卒業してもレポートが書けず、このままでは子どもの前に立てないと言い...卒業してからレポート指導をして下さいと、私の部屋に通って来ました。そして、幼稚園実習で出会った、4歳の女の子Sちゃんのエピソードを書きました。その女の子は、4歳児なのに、実習生の自分にまわりつく子でした。しかしエピソードは書けたが、なかなか考察することができず、2か月も過ぎた頃に“Sちゃんの気持ち”を受け取っていない自分に気づき、“Sちゃんごめんなさい”と大泣きします。自分勝手に自分の都合のよい考えしかできていない自分と向き合い、「自分勝手な、わがままな自分から抜け出る“大人になる”」と結論づけたレポートを提出します。

そのレポートに対し、私は「どんな " 大人 " になるの？」 「モデルは居るのか？」と問いかけました。その時、彼女は動けなくなります。身近にモデルになる大人が居ないので。

もう一つ紹介します。帯広に保育園に就職した3年目の卒業生のお便りです。少し成長の遅れている1歳半の女の子が、みんなから遅れて、やっと二足歩行を始めた様子を書いています。2, 3歩歩いて尻もちを着き、元の位置に戻り何度も歩き始める姿に、人間の素晴らしさ、誇らしさを感じながら、心から喜び、応援している内容です。ここでは“人間の尊厳”を考えさせられます。“1歳半の女の子”を、一人の人間として正面から向き合い精一杯受け止めている。

こうした子どものエピソードを紹介し、皆さんもエピソードを書いてくれました。十分に話し合う時間を持たず、残念で、申し訳なく思っていますが、こうした子どものエピソード記録を書き、考察する学びを、私は単なる保育の方法や技法とは考えていません。

今年は戦後70年という大きな節目の年ですが、私が生まれたばかりの1950年代に、日本の教育現場で“綴方教育”が全国に拡がり、「やまびこ学校」に代表される素晴らしいたくさんの方々の教育実践が生まれました。この教育実践は日本の社会が豊かになり、急激な社会変化の中で消えていきました。しかし、今は消えている綴方教育の思想の“水脈”を、明德の保育で学ぶ教育実践の中で、私は皆さんと手探りしながら、掘り起こす作業を続けてきました。明德の学びは、この大先輩たちが残してくれた綴方教育の思想につながるものであると考えています。

先ほど紹介した40回生のレポートは、相手と向き合い、自分と向き合い、相手の立場、気持ちを理解し尊重し合っています。自分と向き合い、悩み苦しむ、大人として生きようと考え、決意しようとしている姿があります。

明德で保育を学ぶという意味は、決して保育の方法を学ぶだけではない。戦後の貧しかった暮らしの中で全国の教育現場で、大先輩たちが残してくれた教育実践の思想につながる学びであったことを紹介しました。

どうぞ、明德での2年間を、誇りに思い、自信を持って社会人として、生きてほしいと、願っています。そして、迷った時、いつでも明德に戻ってきて下さい。

これで、学長の式辞とします。

特集II 箴学長退任にあたって

明德での40年をふりかえって

1975年からこの明德に勤めてきた箴光夫先生が、この3月で退任されます。そこで、『月歩学歩』では、学生へのメッセージに加え、3月21日（土）に箴先生が卒業生約80名に向けて行った「最終講義」についてもインタビューしましたのでご紹介します。



◎最終講義が開かれた経緯

32・33回生（平成14年・平成15年度卒）が中心となり、現代社会論のよしなか先生と企画し、私の明德での40年間の歩みを語る時間を作ってくれました。

テーマは「豊かな関係を創造する保育者養成の可能性」。当日は10回生（昭和55年度卒）から40回生（平成22年度卒）までの幅広い年代の卒業生約80名が集まり、楽しく、40年間を振り返らせてもらう幸せな時間となりました。

◎保育者養成と40年

最初の頃は保育ではなく、施設実習を担当していたことから福祉施設を訪ねていました。本学の専任であった加藤次郎先生ともその中でお会いしましたが、様々な福祉施設の方たちと今に至る関係を作ってきました。

私の中では1980年を境に学生が違くと線引きしていますが、その頃の1.57ショックやエンゼルプランの流れを受けて、子育て支援でも動き出します。帯広や沖縄の認可外保育園などに通いました。そのうちに学長に就任することになり、「保育者養成教育の総合学習・総合演習」で、「相手を識る・自分を識る」というテーマを設定して明德の教育実践の方向性を位置づけ、それをずっと展開させていくこととなります。沖縄や帯広、そして最近では鹿児島に通い、時には学生や卒業生を連れて行って、最終的には就職させています。



子育て支援が動き出した頃、外部の4名の先生方と共同で「90年代<子育て支援>における育ちあう関係性に関する実証的研究」について勉強していましたが、その他にも帯広や沖縄で、私よりも一つ上の世代の、命をかけてものすごい保育をしている先生方と出会いました。このことは、当時の私にとっては大きな出来事でした。

また、学長職を離れていた期間を合わせて担当していた三つの授業、つまり「沖縄研修」（1999～2015年）・現代社会論の「北の国から」（2003～2010年）・ゼミの「エピソード記録・考察」（2005～2010年）を通して、私がずっと言い続けてきた教育課程の構造化・教科の統合化といったことが、自分の中でやはり検証できるということがはっきりと位置付けられました。

◎エピソード記述と戦後の教育実践

2005年から2010年まで、ゼミでエピソード記録を続けました。何人かの卒業生については、今でもそれぞれの内容を語ることができます。

私の恩師の一人でもある北田耕也氏の「一九五〇年代の教育実践と子どもの共存感覚」（『教育』30巻8号 [1980年 風土社] に掲載）という論文では、綴り方教育を取り上げた戦後教育の思想について書かれています。私はエピソード記録、今の言葉で言うラーニングストーリーと重なって、今はもう日本の社会の中でも教育界の中でも消えているこういう教育実践の水脈を、学生たちと一緒に掘り起こしてきました。そういう意味で、いろいろな保育の実践者と広がりを作ってきたことや、戦後教育の思想を掘り起こしながら新しい形のラーニングストーリーを作ったことは、学生たちと楽しさを共有できた学びだったと思っています。エピソード記録というのは保育の方法ではなくて、戦後教育の実践の思想を、私が私なりにずっと影響を受けながら掘り起こしていたものです。それができたのは40回生までがギリギリなのだろうという感じもしていましたが、教育実践演習で関わった44回生（平成26年度卒）も、私と3・40分やり取りをすれば、やはりエピソードを書けるようになりました。だから、今年の最後に学生たちのレポートに触れた時、学生たちの変化に対応しながら、もっとやり方があったのだろう、と気づきました。自分や他者、自分の暮らしや社会と向き合っている彼女たちの姿を見ると、共存感覚の深まりのようなものが可能だったのだろうと、今40年間を振り返った時に改めて思い起こしています。



◎40年を振り返って一戦後70年の節目に寄せて

「一九五〇年代の教育実践と子どもの共存感覚」を執筆した北田耕也氏は現在87歳ですが、大音寺一雄というペンネームで『下天の内』『一塵四記』（2013年及び2014年 藤原書店）という小説2冊を書いています。この中に、東大の教育学科を出ているにも関わらず教養のなさを嘆いている場面があります。その2つ上の世代には、たとえば沖縄の太田昌秀知事や、歴史学者の色川大吉さんなどがいます。その前後の人たちは皆、1944年頃に学徒動員され、特攻で死んでいきました。

そのような時代に生きた87歳の、1928年生まれの先生を、私はずっと追いかけてきました。その先生自身は、『<長詩>遙かな「戦後教育」』（2012年 未来社）という本の中で、同じ中身をやはり追いかけています。そんな先達がいる中で、私は養成教育の教育実践を自分の中で消化しながら、自分なりに各論を実践していたのかもしれませんが。そんなことはあまり意識しないで、その時その時の課題に取り組んできましたが、この40年を振り返ってみた時に改めてそのことに気づきました。

今は戦後70年という節目ですが、時代や社会の中に「格差」や「貧困」という形で、80年代90年代よりもむしろ暮らしが見えやすくなっています。それなのに、そのことに対して国民一人ひとりがものすごく鈍感になっている。それ以外にも、東北、福島原発の問題や、貧困格差の問題、沖縄と政府との闘いなど、今の日本は様々な問題を抱えています。

それらを教育の中で掘り起こし、日本の社会で生きる時にどのように注目していかなければならないか、ということが私たちの課題です。



◎学長からのメッセージ

保育の世界は、今の時代の中でとても夢があって楽しい世界です。その夢というのは、「成長」という変化でもあります。子どもに何かさせて楽しいのではなく、子どもが変わる、その変わる子どもの中に入りながら自分が変わる。子どもの変化する中に自分が飛び込んだ時に、自分の変化、成長も見える。それが保育の世界なのでしょう。それを実現するには、この養成教育の2年間で何を自分の中に獲得するのか、ということなのだろうと思います。私たちはそれを総合演習のような「体験から学ぶ」という形で実践してきました。北田耕也氏の「一九五〇年代の教育実践と子どもの共存感覚」という論文の中に、母鶏と雛が卵の外と中からつつきあう、影響し合う、それがとても上手く作用した時に花開くという意味の「啐啄」（そったく）という言葉がありますが、教員と学生とが一緒に学びを作っていく関係でないと、それは難しいと思います。

だから私は、保育の勉強をさせるという状況ではない学生たちに対して勉強させるというのは、違うと考えています。何かを求めている本人が、私とやり取りできる中で、本当に自分の中に生きようとするものをつかむ。それが影響しなかったら、絶対に勉強しない。そんな感じがします。

この2年間で私が大事にしているのは、ラーニングストーリーを自分の中でいかに描ききるかということでした。そのためには、最低限のルールは守らなくてはならないのかもしれないかもしれません。そして、絵本でも人でも、素敵だなどと思うものに出会うこと。何かに出会って、自分でない人から受けることの嬉しさみたいなものを体験する、そんな学びを作ってほしい。そうすれば、いろんな場面で保育が楽しくなるんだろうなという気がします。

1年生の3月

1年間の実習での学びから

片川 智子

3月4日・5日、実習事後指導が行われました。ここでは、この1年間の実習（幼稚園・保育所・施設）をふりかえり、それらを通して学んだことを文章にまとめ、それを一人ひとりが発表する機会を設けました。学生たちはこの1年間でどのようなことを学んできたのでしょうか。担当の片川先生よりご報告です。



昨年4月に入学した1年生は、1年間の学びを終え、2年生になろうとしています。保育者になるためには様々な学修がありますが、その核となるのが実習と言えます。実際に子どもや利用者に関わり、職員の方に学びながら、日頃の学修を確かめたり、知識技能の必要性に気づき、実践と机上学修とを循環させたりしていけるからです。1年次には、ほぼ1年を通しての幼稚園での実習、1月末～2月に掛けて2週間ずつ保育所実習、施設実習を行ってきました。また、最後には全ての実習を振り返りまとめたものを、一人ひとり発表し、意見交換を行いました。ここで、発表された学びのエピソードとそこでの意見交換の一部から、学生の実習を通じた学びをご紹介します。

30人程のグループに分かれて行った発表会では、様々なテーマが話されましたが、私の参加したグループでは、特に「積極的な関わり」や「言葉だけではないコミュニケーション」について多く意見交換を行いました。

ある学生は、幼稚園実習の際一人でいた女の子に話し掛けた時の様子を振り返り、「もしかしたら一人で居たかったのかもしれない、そうだとしたら話し掛けない方が良かったのではないか」と考え至ります。このような経験から、「自分から関わることだけが良いこととは限らないのだと気がつきました。それに気がついてから、自ら接しようとはするけれど、相手の表情を見るように心掛けるようになりました。」と述べました。自分から関わること＝良い、なのではなく、相手が何を考え、何故そうしているのかを理解しながら関わる（敢えて関わらないことも含めて）ことが必要だと、“相手にとって”という視点から考えようとしています。そして表情がその手掛かりになるということです。

発表会ではこのような「表情や行動を通じたコミュニケーション」についての気づきも多く挙げられました。続いて、施設実習で出会った言葉の話しえない利用者との関わりから、言葉だけではないコミュニケーションについて考えた発表をご紹介します。

この1年間で私は人との関わり方、コミュニケーションの取り方を改めて学びました。生活している中で人と関わる、話すなど当たり前で自然にできていると、今まで思っていたのですが、いざ実習になると全く逆になり、恥ずかしさや緊張で、他人と関わるのに大きな壁が出来てしまうということが分かりました。

～中略～会話が実際に成り立たなくても、利用者さん一人ひとりの行動をよく観察し、声のトーンや顔の表情、健康状態で利用者さんの変化に気づいたりすることが大切なのだと学びました。

何故そう思えることが出来たのかというと、1さんとの関わりがあったからです。1さんはいつも言葉ではない声を張り上げていました。私は食事の介助をさせていただいたのですが、お茶を口元まで持っていき飲ませようとしても、嫌がったり、食べ物を口に入れても、吐いてしまったり、怒るように声が大きくなったりすることがありました。私はそのような時、その場から逃げたくなったり、「どうして食べてくれないの」という気持ちになったりしました。普通なら「何が気に入らないの?」と聞けば答えが返ってくるはずなのに、言葉がない会話なんて難しすぎると思いました。ですが、何度も関わる中で、ご飯を吐いたりするのは、これ以上食べたくないということや、トイレに行きたい、気分が良くないという理由があったり、何よりも私が食べ物を口に入れようとする前に声を掛けたか掛けなかったかということが関係していることが分かりました。そのような思いを、1さんは私に吐いて教えてくれていました。

言葉の代わりに行動に出るなど、色々な表現の方法があり、私たちがそれに気づけないと、その人のことを何も理解できないのだと分かりました。これは、保育園、幼稚園の子どもと関わる時でも大切なことだと思います。私はそのために、小さなことでも読み取れるように行動等をよく観察し、その人が何を求めているのかを理解できるように意識していきたいと思います。

小谷さんはこの発表の後、「何故、言葉の話せる保育園や幼稚園の子どもと関わる時でも大切だと考えたのか」という質問に対し、「コミュニケーションは言葉だけではないと気づいたから」と答えました。これは、日常生活にも通じる気づきです。人との関わりの中で当たり前のことのようにですが、このことを日常的に意識することはあまりありません。意識した時に、また新たなことに気づくことが出来るでしょう。

1年間の実習やその振り返りを通じて、一人ひとりに学びがあったはずですが、実習で気づいたことを日常生活や授業や次の実習と重ねて考えていけると、学びはぐんと広がり、深まります。学生の皆さん、是非実習での学びを念頭に、新2年生の学びに向かっていきましょう！

PROFILE

教員名



やまの りょういち
山野 良一

担当科目

社会福祉、相談援助、
児童家庭福祉、
現代社会論等

メッセージ

以前お伝えしましたが、山野先生が本を出版されました。この本の第2章は、保育者となる皆さんにもぜひ読んでいただきたい内容です。図書館にも所蔵されていますので、ぜひ手に取って下さい！（編集担当より）

教員からのおすすめ

本学図書館には、各教員の専門分野や関心が一目瞭然の「推薦図書コーナー」があります。この連載では、その一端のみならず、教員から皆さんへの「おすすめ！」を紹介していきます。今回は、山野先生からご自身のご著書の紹介して頂きました。

『子どもに貧困を押しつける国・日本』 大学進学を決める保育・幼児教育の質

昨年出版した「子どもに貧困を押しつける国・日本」（光文社新書）という本の第2章のタイトルは「最低の保育・教育予算、最高の学費」です。ここでは、子どもの貧困を解決するためには、大学の学費などを安くした方がいいし、保育や幼児教育の質を高めた方がいいと主張しています。

山野先生、変じゃないの！ 確かに、高校や大学の学費など教育費が安くなれば、お金に困っている家庭の親や子どもは助かるよ。それに、経済的に大変な家庭の子どもが大学に進学しやすくなったら、「将来」の子どもの貧困は減るかもしれないよ。でも、保育、幼児教育って？ あんまりにも先の話をしすぎるんじゃないの？と思われるかもしれません。

でも、ヨーロッパなどでは子どもの貧困を「将来」的に解決するには、大学や高校、さらには小学校では遅いとされているのです。理由は簡単です。大学に入るために必要な学力の基礎は、小学校前に決まると言われているからです。これは詰め込み式の教育を薦めているわけではありません。そうではなくて、落ち着いて学ぶための基礎、つまり勉強したいという意欲や友達や先生との安定した協力関係には、保育所や幼稚園の先生と子どもとの関わりが一番に強い影響を与えることがいくつかの研究から見えてきているからなのです。

その子の人生を左右するのは、実は小学校や高校の先生たちじゃないんですよ。将来の皆さんなんです。そんなことを意識しながら勉強を深めて下さいね。

! hot news !

new movements of this month in meitoku
! 今月の明德速報 !



研修生「学びの成果報告会」

本学には、卒業後さらに学びを深めたい方のために「研修生」という制度があります。保育現場で非常勤職員として働きながら、月2回程度スクーリングに参加し、事例検討等を行っています。

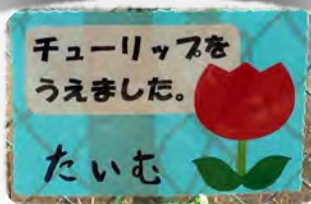
今年度は2名の研修生が1年間の学びを終え、3月16日にその集大成を報告しました。慣れない職場で働きながら学び続けることは大変だったと思います。1年間お疲れ様でした!



MEITOKU SNAP



MEITOKU SNAP



中庭の木蓮は散りましたが、学友会の「ありがとうの木」も桜の木も満開、チューリップも芽生えています。季節の移り変わりを感じます。

明徳の4月

31日 (火)

・ガイダンス (2年生)

1日 (水)

・授業開始 (2年生)

3日 (金)

・第46回入学式

6日 (月)

・ガイダンス (1年生)

8日 (水)

・授業開始 (1年生)

29日 (火)

・祝日授業 (2年生)

編集後記

2014年度の月歩学歩、最後の号となりました。それにふさわしく、年度を締めくくるメッセージ溢れる号になったと自負しています。たびたびお伝えしていたように、3月15日に卒業した学生たちは、学校全体を引っ張っていくエネルギーのある学年であり、私たち教員も刺激を受けた学年でした。この学年が教えてくれたことは、本当にたくさんあります。彼ら彼女らと出会えたことは私の人生にとってとても大きなことであり、一人ひとりに支えられた2年間でした。本当にありがとう！そう何度でも伝えたいです。そんな皆だからこそ、この2年間で楽しみながら、悩みながら取り組んだことに誇りを持って、自分らしく輝いてほしいと心から願っています。1年生は2年生になりますね。答辞で高橋さんが述べていたように、「自分のしたいことに挑戦するのは、心から楽しいこと」！「だから、あと1年、自分のしたいことに思い切り挑戦してください」。来年度、みんなとまた新たな1年をつくることを楽しみにしています。また、現学長の明徳、学生、保育に対する思いを受け、教員として身が引き締まる思いです。

そして最後に...月歩学歩を1年間お読みくださった皆さま、ありがとうございました。学生の皆さんがいたからこそ、発行できていたと思っています。試行錯誤しながら毎月発行していましたが、学生を中心とした様々な出来事をお伝えできることは喜びでもありました。学生皆さんの姿が、明徳での日々の様子が、少しでも生き生きと伝わっていたなら幸いです。(田中)

★INFORMATION★

明徳HPの「めいたんブログ」でも、明徳の「今」を日々発信しています。ぜひご覧下さい。

<http://chibameitoku.blog53.fc2.com>

発行：千葉明徳短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel:043-265-1613

Fax:043-265-1627

mail:tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:<http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html>

編集

田中 葵

伊藤 恵里子

高森 智子



読者の皆様へ：『月歩学歩』に対するご意見、ご感想を郵便やメールにてお寄せ下さい。